

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：30106

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04230

研究課題名(和文) 北海道における精神保健ソーシャルワークの歴史記録と教育コンテンツの構築

研究課題名(英文) Construction of historical record and educational contents of mental health social work in Hokkaido

研究代表者

永井 順子 (Nagai, Junko)

北星学園大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：00386559

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、北海道を6区域(道南、道央、道北、オホーツク、十勝、釧路・根室)に分けて精神保健ソーシャルワーク(以下、精神保健SW)の歴史記述を行うことを目的に、各地の史料・資料の収集、整理と、初期のPSW等へのインタビュー調査を行った。その結果、PSWが1960年代から保健所との連携役や家族会の支援など、他職種とは異なる役割を担っていった地域や、教育関係者や教会関係者など多様な担い手とともにPSWが精神保健SWを展開した地域の存在を明らかにできた。また、上記調査・分析に基づき、教育コンテンツ「北海道における精神保健ソーシャルワークの先駆者たち」(PPT)を作成し、試行授業を実施できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、各地に散逸していた資料・史料を収集、整理し、歴史年表、関連文献一覧を作成するほか、先駆的PSW等18名へのインタビュー調査の逐語録作成を行うことができた。このことは、今後の北海道の精神保健SWおよび精神科医療の歴史研究に対して、資料集の意義がある。また、精神保健SWの歴史教育コンテンツを作成、精神保健福祉士養成課程の学生に対して試行授業を実施でき、PSWという職種が各時代や地域に根差して多様にソーシャルワークを行うことへの理解の深化、先駆者への敬意の形成などがコンテンツの教育効果としてあることを確認できた。

研究成果の概要(英文)：In this study, we collected historical materials and conducted an interview survey with early PSWs in 6 areas (Donan, Doo, Dohoku, Okhotsk, Tokachi, Kushiro and Nemuro) of Hokkaido. By this we described the history of mental health social work in each area. As a result, it was clarified that in some areas, PSW played a different role from other occupations such as coordinating with public health centers and supporting family associations from the 1960s, and that in other areas, PSW developed mental health social work with various leaders such as educators or pastors. In addition, based on the above survey and analysis, we were able to create educational content "Pioneers of Mental Health Social Work in Hokkaido" (PPT) and try the class.

研究分野：社会福祉学

キーワード：精神保健ソーシャルワーク 北海道 歴史 先駆的PSW 教育コンテンツ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1964年の日本精神保健福祉士協会の設立から50年以上が経過し、日本における精神保健ソーシャルワーク(以下、精神保健SW)も一定の歴史を重ねてきた。ただし、その歴史記録については従来「協会史」が中心で、地域の独自の精神保健SWの歴史については、学術研究は乏しく、各種史料・資料も散逸した状態であることが推察された。

上記研究動向、精神保健SWの黎明期を築いた先駆者たちの高齢化は進み、歴史的事実の聞き取りや当時の資料収集は猶予のない時期に来ている。研究代表者らは北海道で精神保健福祉士養成教育に携わり、一般社団法人北海道精神保健福祉士協会とも連携するなかでこの点を実感し、養成教育のなかで地域に根ざした精神保健SWの歴史を伝える必要性を感じてきた。北海道の精神保健SWには、帯広市における「帯広ケアセンター」や、浦河町の「べてるの家」をはじめ、全国的に見ても独自性をもつ実践が豊富であり、この地の歴史の解明、体系的・包括的歴史記録の作成には十分な学術的価値と教育上の価値があると考えた。

2. 研究の目的

精神保健福祉が「入院医療中心から地域生活中心へ」の大きな転換期にある現在、精神保健福祉士養成教育課程の学生や現場の精神保健ソーシャルワーカー(以下、PSW)が、自らが所在する地域の精神保健SWの歴史を知り、誇りにすることができれば、今後の地域に根ざした精神保健SWの展開にも有効に作用するものと思われた。このような問題意識のもと本研究では、以下の2点を目的とした。

北海道の精神保健SWの歴史の解明、体系的・包括的な記録の作成。

精神保健福祉士養成課程における精神保健SWの歴史教育コンテンツの構築。

3. 研究の方法

本研究では、広域である北海道を、第三次医療圏の道南、道央、道北、オホーツク、十勝、釧路・根室の6区域に分け、区域ごとの精神保健SWの歴史について、資料・史料の収集、分析と、先駆的PSW等18名へのインタビュー調査を実施した。研究の実施にあたっては、北星学園大学研究倫理審査委員会の審査を受け承認を得た(17-研倫13号、17-研倫21号、18-研倫22号、19-研倫4号、19-研倫25号)。

また、上記の調査・分析に基づき、教育コンテンツ「北海道における精神保健ソーシャルワークの先駆者たち」(PPT)を作成し、2020年1月24日、名寄市立大学の精神保健福祉士養成課程の2~4年生55名を対象に、試行授業とアンケート調査を実施した。実施に際しては名寄市立大学倫理委員会の審査を受け承認を得た(19-054)。

4. 研究成果

4-1. 各地区の精神保健SWの歴史の記録

以下に概要を記載する。なお、本研究では歴史年表と関連文献一覧の作成、先駆的PSW等へのインタビュー調査の逐語録作成も行った。

(1) 道南(函館市を中心に)

北海道の精神科医療は1881年に函館病院内に「癲癩病室」が設けられたことに始まる。これが1936年に函館市立柏木病院となる。1950年7月には函館市最初の私立精神病院である渡辺病院が渡辺栄市院長(日本精神病院協会2代目会長)により開院、1951年11月には富田病院が開院した。1968年10月末には、函館市を含む渡島地方では精神病床のある施設が他に5つあった。1970年9月には渡辺病院が亀田郡大野町に全開放の分院・美ヶ丘病院を開設した。

精神保健SWの動向としては、函館保健所の精神衛生相談員であった荒木美喜子氏(1964年入職で北海道初の精神衛生相談員と思われる)がこの地区で最も早くPSWを自認した。次いで1970年に市立柏木病院に永長昌之氏、渡辺病院に加賀正敏氏、1971年に富田病院に塚八正宣氏が「ケースワーカー」として入職した。そして、1971年には「保健所と病院の連携を保つこと、相互の質的向上をめざすこと、そして何よりも話し合う場をもつこと」を目的として、保健所相談員と各病院PSWとの連絡会である「はこだてソーシャルワーク・フォーラム」が誕生、2年間ほど機関紙も発行していたことは特筆すべき点である。

1977年には美ヶ丘病院退院者向けの共同住居が創設され、PSWらによる訪問活動が実施される。1980年に渡辺病院に入職した越野之博氏がこれを担い、また、1983年に函館保健所に入職した長船浩義氏が社会復帰学級、保健所デイケアの運営、家族会(愛泉会)への参加・協力、回復者クラブ(すずらん会)への支援、作業所(千蛭社ほか5か所)の立ち上げ、職親事業、訪問活動(未受診の人を含む)運営補助事業、助成事業の創設等を行政のPSWとして積極的に展開したことは他の地区にないこの地区の特徴であった。

(2) 道央(東胆振、西胆振、北海道立精神衛生センターについて)

道央には、札幌市、小樽市や江別市など札幌市近郊、東胆振、西胆振と、それぞれ精神科医療を取り巻く事情の異なる地域が含まれており、単一に分析することに難しさのあることが明らかになった。そこで本研究では、室蘭市・登別市を中心とする西胆振、苫小牧市を中心とする東胆振における精神保健SWの展開過程について主に整理した。また、1968年に札幌市に

設立された北海道立精神衛生センター（現・北海道立精神保健福祉センター）では、PSW として採用された金田迪代氏や佐々木敏明氏が全道の PSW の模範となり、精神保健 SW をバックアップしていたことが確認できた。

西胆振では、1955 年、室蘭と登別の間の地で恵愛病院が開設、1956 年には総合病院伊達赤十字病院精神科、1957 年には三村病院（室蘭市）、1961 年には市立室蘭総合病院の精神科として祝津分院が誕生する。1964 年に恵愛病院初代院長・千葉寿良医師が三愛病院を開設した。

1966 年には、恵愛病院に佐々木寿男氏、三愛病院に田中秀治氏が「ケースワーカー」として入職、次いで 1967 年、佐々木敏明氏が PSW として祝津分院に入職した。佐々木氏は 1970 年 7 月から国立武蔵療養所に勤務、1974 年に後任として伊達赤十字病院 MSW であった清水耕策氏が着任した。恵愛病院では 1969 年に遠藤三千之氏が、三愛病院では 1973 年に窪谷芳弘氏が 2 人目の PSW として採用された。この地区では、精神科病院の開設後間もなく PSW が採用され、特に三愛病院に定年まで勤務した田中秀治氏や、1985 年に恵愛病院に入職し、現在医療福祉連携部部長を務める佐藤克彦氏は、多くの業務に携わる中で院内・法人内での専門職としての立場を確立、病院の機能拡大に大きく寄与した。

さらに、この地区では病院間の交流がさかんで、苫小牧の佐藤病院、伊達赤十字病院、恵愛病院の三病院で「日胆地区精神病院連盟」が 1957 年に発足し、その後参加病院を増やしていった。1970 年代には、「胆振地区ソーシャルワーカー協会」として、日胆地区の MSW、PSW、企業立病院の衛生管理者、行政からも保健所普及課、保護課職員など毎回 20 数名が集まり、実践力の向上を図っており、MSW と PSW との連携がこの地区の特徴であった。

東胆振では、1955 年に佐藤玄一氏が佐藤病院を苫小牧市に開院、次いで 1963 年に苫小牧緑ヶ丘病院、鶴川厚生病院に精神科が設置され、1964 年に佐藤病院の分院として柏原病院が開設した。同院は 1970 年 11 月には工業基地の開発地となり廃止され、樽前に道央佐藤病院が開院、1971 年 12 月には佐藤病院を廃止して矢代クリニックが開院した。

この地区の初の PSW は 1967 年に佐藤病院に入職した関原靖氏である。関原氏は当時札幌医科大学附属病院円山分院の PSW であった金田迪代氏とともに道央地区 PSW 研究会を開催し、佐々木敏明氏、清水耕策氏、遠藤三千之氏も参加していた。1968 年 9 月には佐藤病院に医療相談室が開設、関原氏が初代室長となり、PSW 業務の礎を築いた。その後も PSW の増員は続き、1973 年には後に医療相談室室長となる佐土原美和子氏が入職、医療相談室には常に 5 人以上の PSW が配置されていた。同院の社会復帰支援が本格化する 1975 年以降も複数の PSW が入職、佐土原氏などが院長の信頼を得、院内でソーシャルワーク部門が確立していった。

1986 年には「精神病院の改革を！地域精神医療活動の充実した展開を！」をスローガンに完全開放の植苗病院が開院した。同年 9 月には相談室が発足、道央佐藤病院から移った榊原省二氏が初代室長となる。その後、共同住居検討委員会、外来患者クラブ、訪問看護、職親開拓などと業務が拡大し、後に北海道精神保健福祉士協会会長を務めた鈴木（旧姓・谷）浩子氏、寺田（旧姓・本間）香氏、望月和代氏、吉本政秀氏ら PSW が活躍した。

1990 年代までは両病院により、各病院の入院患者、通院患者に利用を限定した社会資源が創出されていたが、1991 年地域住民主導型の「苫小牧精神障害者社会復帰支援協会もなみ会」が設立し、「もなみ共同作業所」を開設、利用者の通院先を問わない施設となった。これを契機に吉本氏が植苗病院を退職（1993 年 3 月）、1996 年 3 月の社会福祉法人せらびの設立に向かっている。この社会福祉法人設立により医療機関の枠を超えた地域の拠点・社会資源作りが活発化したことは、この地区の精神保健 SW の展開において特筆すべき点である。

（3）道北（稚内市、名寄市、旭川市について）

稚内市では 1962 年に稚内市立病院に精神科が開設されるも、病床数の少なさと固定医の確保に苦慮していた。これを補うべく、1975 年に同院に「精神衛生相談室」が開設して、PSW が置かれ、PSW や医師らの支援のもと「宗谷地方精神障害者家族会」が設立した。その後、1980 年に市立病院 PSW に着任した中村喜人氏がこの地の精神保健 SW の展開を支えた。また、1977 年に稚内養護学校が開校、1985 年に同校教員であった中村正人氏（喜人氏の兄）の主導で「養護学校の卒業生を育てる会」が結成されると、「家族会」「情緒障害児父母の会稚内支部」と協働して「稚内に共同作業所をつくる会」が結成された。これに市立病院関係者も加わり議論が行われ、行政の経済的支援も得て、1986 年に「手づくり工房木馬館」が開設。さらに、1980 年代後半からは市立病院職員を主軸とした共同住居作りが進み、1991 年に共同住居「メゾン木馬館 91」が開設、1992 年の社会福祉法人稚内木馬館の設立につながった。このように稚内市では、地域資源開拓を行う精神保健 SW を、医療関係者、精神障害者家族会のほか、養護学校教職員や障害児の保護者らによる団体が協力して展開したことが大きな特徴である。

名寄市では、1956 年に名寄市立総合病院に精神科が設置された。一方、同地区における精神障害者社会復帰活動の拠点となったのは日本キリスト教団道北クリスチャンセンターであり、1961 年市立病院精神科にクリスチャンである熊谷豊次医師が着任すると、患者たちが教会の礼拝に参加するなど交流が進み、1965 年頃には、道北地区のプロテスタントの超教派の牧師らにより、精神障害者の中間宿舎設置が議論された。その後、精神障害者家族会、教会、名寄市社

会福祉協議会、市立病院で構成する「名寄地区精神障害回復者福祉協会」が設置主体となった通勤寮「名寄緑ヶ丘寮」が1983年3月に設立、7月には回復者クラブ「グリーン・サークル」が発足し、1984年9月には「緑ヶ丘共同作業所」が開所した。この展開を主導したのは、1979年に酪農学園大学を卒業して道北クリスチャンセンター主事に着任した岸本芳朗氏であったが、同氏は着任後、埼玉県のやどかりの里や北海道立精神衛生センターに研修に行くなどして、寮開設時にはPSWを自認していた。1990年には社会福祉法人道北センター福祉会を設立し、緑ヶ丘寮、共同作業所が法定施設化。岸本氏を中心に食と職と住の場所を分けて「外に出る」ことを大切に地域生活支援体制作りを制度に先駆けて構築してきたことがみてとれた。

旭川市では、道内で2番目の私立精神科病院である相川病院が1941年に開院、1955年に旭川赤十字病院に精神神経科が開設し、ほどなく4つの私立精神科病院が設立、1963年に市立病院に精神科棟が完成した。1965年には旭川精神衛生協会が発足し、精神科医や保健所保健婦らが協力して精神衛生活動を展開、家族会、回復者クラブや断酒会、社会復帰学級などの活動を支えた。1960年代から準公立の総合病院にソーシャルワーカーが採用されていたが、上記精神衛生活動への関与は少なかった。他方で、1961年に設立の旭川精神病院(現・旭川圭泉会病院)において、福祉職を志向する乳井雅子氏が1973年に「作業療法助手」として採用され、患者会「アップル会」(1979年開始)の活動支援を行うなかでPSWとしての意識を強め、1988年に同院デイケアの設立に関与、院内でPSWとしての地位を得た。その結果、1990年には院内に「相談室」を開設、2000年代以降、PSWも増加、医局や事務部門とは異なる「社会復帰・地域医療連携部」へと成長した。また、1987年の社会福祉士国家資格化の前後から市内他院のPSWとの連携も強め、1995年には乳井氏が名づけ親となり、旭川市内のPSWの集まりである「ふくろうの会」が発足したこともこの地区の精神保健SWの展開の画期であった。

(4) オホーツク(網走市、北見市、遠軽町、紋別市について)

各地の関係者への聞き取り調査などを試みたが、この地区の精神保健SWの展開過程を明らかにすることは十分にできなかった。網走市に1952年設立の精神科病院である北海道立向陽ヶ丘病院があるも、精神保健SWの展開は近年まで見られなかった。北見市では、1959年に北見赤十字病院に精神科が設立、1980年代より同院精神科のPSW林浩幸氏により家族会支援、作業所設立支援が行われた。遠軽町では1960年に遠軽学田病院が設立しているが、現地調査の結果、関連資料は紛失、PSWの足跡についても不明であった。紋別市では、北海道立紋別病院に1961年に精神科が開設、1974年に着任した弟子丸和博医長のもと、1975年には道内で最も早く通勤寮・潮見寮が設立された。また、後任の井本浩之医長や看護職によって病院を軸に広域の家族会運営などが行われたことが文献に見られたが、1980年代に紋別保健所の保健師であった志子田結花氏への聞き取り調査によってもPSWの存在は確認できなかった。

(5) 十勝(帯広市とその近郊を中心に)

1953年に北海道立緑ヶ丘病院が設立され、広域の精神障害者の入院治療を担うことになった。また1960年代には国立十勝療養所、総合病院帯広厚生病院、帯広協会病院に精神科が設置されたほか、私立精神科病院として柏林台病院、大江病院が開設した。

1969年には帯広協会病院に門屋充朗氏がPSWとして入職、同年に門屋氏が大江病院に移ったため後任に小栗静雄氏が入職。また、草田修治氏が帯広厚生病院に入職した。この3名のPSWを中心に地域活動が推進されていく。その過程ではPSWの増員も見られ、帯広厚生病院に服部雅之氏(1976年)、大江病院に佐野孝文氏(1976年)、佐々木雅美氏(1978年)、道立緑ヶ丘病院に都甲和政氏(1984年)、国立十勝療養所に三上雅丈氏(1984年)が入職している。

1968年から精神科医療機関のPSW等と管轄市町村の保健婦等による担当者会議が開催され、1975年からは精神科医と3病院のPSWが月1回周辺保健所に診察に行き広域の患者の医療を支えるなど、保健所と病院の連携が密であったことがこの地区の特徴である。また、1969年に「十勝PSW研究会」が結成され、脱施設化や多職種連携の理念を共有、その成果として、病院とは独立した組織としてPSWたちが「十勝精神障害者社会復帰促進協会(朋友会)」を結成し、1982年に共同住居「朋友荘」をどの病院の退院者でも受け入れるという「オープンシステム」で開始した。その後も「キュア(治療)とケア(生活)の分離」を堅持し、ケアの拠点として1991年に帯広ケアセンターを設立。また、3つの「いき場」(「生き場」=住居、「行き場」=日中活動、「活き場」=余暇)を利用者中心のケアの軸として地域の様々な資源をパッチワークして社会資源を創出する精神保健SWを展開し、平均在院日数が96日(2018年)という全国的に見ても優れた地域リハビリテーションシステムを実現したことが改めて確認できた。

(6) 釧路・根室(釧路市を中心に)

1956年に板垣病院(現・優心病院)が開院したことがこの地区の戦後の精神科医療の始まりである。1959年には市立釧路病院精神神経科診療開始、翌1960年病床開設、釧路赤十字病院

に精神神経科が開設、1964年には市立病院精神神経科医長であった清水幸彦医師が清水桜ヶ丘病院を開院した。市立病院では1967年に最初のPSWが採用、その後赤十字病院にも採用された。1977年に釧路保健所社会復帰学級「水曜サークル」が市立病院、赤十字病院入院患者対象に開始し、各病院のPSWが同伴していた。1984年には釧路保健所の回復者グループを母体とする竹の子共同作業所が設立、1990年には釧路市内全ての病院と家族会（「おおぞら会」）から理事が入る形で社会福祉法人釧路恵愛協会が設立し、竹の子共同作業所が発展して道内初の法人立授産施設である「いずみの里」が開所した。また、1988年に板垣病院にPSWとして入職した佐々木寛氏（現・北海道精神保健福祉士協会会長）が1991年頃から病院周辺に部屋を借りて退院患者を住まわせて訪問することを行っていた。1996年には佐々木氏が共同住居の支援を開始、1997年には北海道で初の地域生活支援センター（無認可）を開設し、2001年に法定化、赤十字病院PSW千葉美也子氏（1984年入職）、市立病院PSW石川洋子氏の協力も得て、この地区の精神障害者の生活支援の連携の拠点として発展した。

4-2. 北海道における精神保健SWの歴史教育コンテンツの作成と試行授業後のアンケート調査結果

(1) 教育コンテンツ「北海道における精神保健ソーシャルワークの先駆者たち」

作成したPPT（スライド39枚）の一部を以下に掲載する（図1～3）。当日は、各地の精神保健SWの先駆者たちの活動についてスライドに基づき永井、松浦、福富より説明した。また、実施したインタビュー調査のなかの印象的なメッセージを「〇〇氏の言葉」として取り上げた。

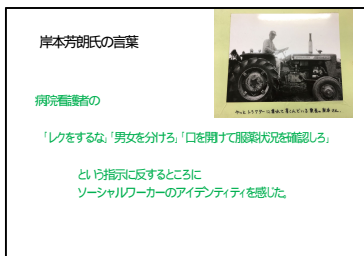
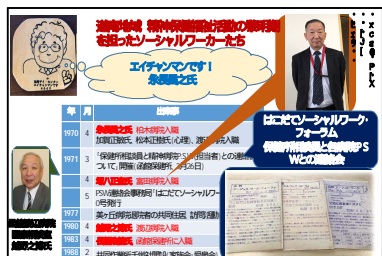


図1. 函館のPSWの紹介

図2. 十勝の精神保健SWの展開

図3. 岸本氏の言葉

(2) アンケート調査結果

対象学生は2年生が24名、3年生が19名、4年生が12名、うち北海道出身者が32名であった。「講義内容は興味を持てるものでしたか？」に対しては「持てた」が35名（63.6%）、「まあまあ持てた」が17名（30.9%）、「あまり持てなかった」が2名（3.6%）で無回答が1名だった。「北海道の精神保健ソーシャルワークの歴史を学ぶ意義は感じられましたか？」に対しては「感じられた」が37名（67.3%）、「まあまあ感じられた」が16名（29.1%）、「あまり感じられなかった」が1名（1.8%）で無回答が1名だった。「今回の講義の前と後では、PSWの仕事への印象が変わりましたか？」に対しては、「変わった」が22名（40.0%）、「変わらない」が18名（32.7%）、「どちらともいえない」が15名（27.3%）であった。「変わった」との回答にその内容の自由記述を求めたところ、「一言にPSWといっても、その現場または地域によって異なった活動をしていて、正解もないしすごく人間的であると感じた。」「精神保健福祉分野の北海道における先駆者である方たちの実践や考えを聞き、自分が今後どのような姿勢でワーカーとして臨んでいくべきかを改めて考える機会になったため。」などの記述があった。また、「今回の講義の中で、もっと話を聞いてみたいと思った箇所」を聞いたところ、各地の先駆者たちの言葉についてあげた者が多かったが、「地域によって、支援の仕方がばらばらだということが印象に残った。しかし、それぞれの場所でひとりひとりに合わせたものを考えているからこそばらばらなのかと思った。」などの記述も見られた。

全道を網羅的に紹介する内容であり、実施前には情報量の多さを懸念していたが、学生たちは消化できており、全体に好意的な反応が見られた。今後、改善点を検討し、より普及できるかたちにブラッシュアップしていき、現場のPSWへの公表の機会も持つ予定である。

4-3. 小活

本研究の目的である 北海道の精神保健SWの歴史の解明、体系的・包括的な記録の作成と精神保健福祉士養成課程における精神保健SWの歴史教育コンテンツの構築について、一定の成果をあげることができたと考える。特に散逸していた各地の史料・資料の収集と、先駆的PSW等へのインタビュー調査を実施できたことは、北海道の精神保健SWおよび精神科医療史の歴史研究の今後にとって意義が大きい。ただし、道央の札幌市とその近郊の調査が十分でなかったことは残された課題であり、今後も調査研究を継続していく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 橋本菊次郎、永井順子、福富律	4. 巻 5
2. 論文標題 北海道苫小牧における精神保健ソーシャルワークの歴史と展開	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北翔大学教育文化学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 119 - 130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 永井順子、松浦智和	4. 巻 40
2. 論文標題 北海道旭川市の精神保健医療福祉の形成過程における精神保健ソーシャルワークの所在	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北海道社会福祉研究	6. 最初と最後の頁 26 - 37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 橋本菊次郎、永井順子、福富律	4. 巻 4
2. 論文標題 北海道 室蘭・登別地区における精神保健ソーシャルワークの歴史と展開	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北翔大学教育文化学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 195-206
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 永井順子、佐藤園美、橋本菊次郎、福富律、松浦智和、今西良輔
2. 発表標題 北海道における精神保健ソーシャルワークの生成要因～函館、室蘭、帯広の歴史の比較検討から～
3. 学会等名 日本精神保健福祉学会第8回学術研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福富律、永井順子、松浦智和
2. 発表標題 北海道における精神科病院と精神保健ソーシャルワークの展開～地域生活支援への広がりめぐって～
3. 学会等名 日本病院・地域精神医学会第62回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松浦智和、永井順子、橋本菊次郎、福富律、今西良輔
2. 発表標題 北海道稚内市・名寄市における精神保健ソーシャルワークの展開と地域リハビリテーション資源創出の過程
3. 学会等名 日本精神障害者リハビリテーション学会第27回大阪大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 永井順子、佐藤園美、橋本菊次郎、福富律、松浦智和、今西良輔
2. 発表標題 北海道精神保健ソーシャルワークの生成期の概観とPSWの位置の検討～第三次医療圏6区域の歴史記述の試みから～
3. 学会等名 日本精神保健福祉学会第7回学術研究集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 橋本菊次郎、永井順子、松浦智和、今西良輔、福富律
2. 発表標題 北海道帯広・十勝地区における精神保健ソーシャルワークの展開過程にみる地域リハビリテーションのありよう
3. 学会等名 日本精神障害者リハビリテーション学会 第26回東京大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大曾根寛・森田慎二郎・金川めぐみ・小西啓文編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 成文堂	5. 総ページ数 18
3. 書名 福祉社会へのアプローチ 久塚純一先生古稀祝賀[下巻] (該当箇所は、永井順子著「精神病院の変遷～北海道の精神病院史からの試論～」)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐藤 園美 (Satou Sonomi) (10387417)	北海道医療大学・看護福祉学部・准教授 (30110)	
研究分担者	橋本 菊次郎 (Hashimoto Kikujirou) (30433460)	北翔大学・教育文化学部・准教授 (30117)	
研究分担者	福富 律 (Fukutomi Ritsu) (60468840)	東京家政大学・人文学部・講師 (32647)	
研究分担者	松浦 智和 (Matsuura Tomokazu) (90530113)	名寄市立大学・保健福祉学部・講師 (20104)	
研究分担者	今西 良輔 (Imanishi Ryouyuke) (60746478)	札幌大谷大学短期大学部・その他部局等・講師 (40107)	